

現代ビルマ語の借用語に見られる低い促音節*

加藤 昌彦

キーワード：ビルマ語、声調、促音節、借用語

要 旨

現代ビルマ語の促音節は固有語では高く発音されるが借用語では低く発音されることがある。低い促音節の現れる条件を探り、さらに促音節そのものの音韻論的解釈を示す。

はじめに

現代ビルマ語には声門閉鎖音で終わる音節がある。これを本稿では促音節(*checked syllable*)と呼ぶ。ビルマ語の固有語に現れた促音節は、高音域から下降する調値で発音される。ところが、加藤(1998)およびKato(1999)でごく簡単に指摘したとおり、借用語においては促音節が低く平らに発音されることがある。この事実について報告した研究は筆者の知る限り他に存在しない。以降、高音域から下降する調値で発音される促音節を「高い促音節」、低く平らに発音される促音節を「低い促音節」と呼ぶことにする。本稿の目的は二つある。一つは、低い促音節が現れ

* 本稿は2002年4月14日にアジア経済研究所で開かれた「ビルマ研究会」および、2002年7月7日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において開かれた「音韻に関する通言語的研究プロジェクト」(梶茂樹教授代表)の研究会において発表した内容に基づいている。研究会の席上様々なご意見をいただいた方々にお礼を申し上げる。また、ビルマ語の母語話者として、U Hla Myint, U Tin Win, Ko Aung Cho Oo, Ma Phyu Phyu San, Daw Mar Lay, Nan Dahlia Win, Ma Khin Soe Soe Kyaw の7人の方々に調査協力をしていただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

る条件を明らかにすることである。もう一つは、促音節そのものに適切な音韻論的解釈を施すことである。

以下では、まず第 1 章において、促音節の発音の具体例を示す。第 2 章においては、低い促音節が現れ得る環境を明らかにする。低い促音節は「語末」「高い促音節の直前」「下降調の直前」には現れない。これ以外の環境であれば、促音節は原則として高く発音しても低く発音しても構わない。言い換えれば、「語末」「高い促音節の直前」「下降調の直前」以外には低い促音節が現れることができる。第 3 章においては、第 2 章で行った考察の結果に基づき、低い促音節ひいては通常の高い促音節についての音韻論的解釈を行う。結論として、低い促音節は声門閉鎖音で終わる音節に低平調が現れたものと解釈でき、通常の高い促音節は声門閉鎖音で終わる音節に下降調が現れたものと解釈できることを示す。

次に、本稿で扱う借用語の範囲を規定しておかなければならない。ビルマ語にはインドの古典語であるパーリ語からの借用語が大量に見られる。またパーリ語より少数ながらもサンスクリット語からの借用語もある。ビルマ（ミャンマー）国内に住む少数民族の言語、例えばモン語（モン・クメール系）やシャン語（タイ系）からの借用語もある。少数民族語にはビルマ国内に住むインド系住民や中国系住民の言語も含む。低い促音節はこれらの借用語には生じない。したがって、本稿で考察の対象とするのは、インドの古典語および少数民族語以外からの借用語である。残りの借用語は英語からのものが多い。また実は、原語が英語でない場合であっても事実上は英語からの借用語である可能性が高いものが多い。例えば「京都」を表すビルマ語は *còtò* であるが、これは日本語から直接ではなく英語の *Kyoto* を経由してビルマ語に入ったということも考え得る。原語が英語以外の場合に、英語を経由しているかどうかを判断するのは非常に難しい問題なので、この問題について本稿では深く立ち入らない。

ビルマ語の音素目録を以下に示す。括弧でくくったのは、借用語にのみ現れる音素である。なお本稿で用いる表記は特に断らない限り音素表記である。

子音

p	θ	t	c	k	ʔ
ph		th	ch	kh	
b	ð	d	j	g	
(f)		s	ɕ		h
		sh			
		z			
m		n	ɲ	ŋ	N
hm		hn	hɲ	hŋ	
w			y		
hw					
		l			
		hl			
		(r)			

母音

i	u
e	o
ɛ	ɔ
a	

声調

mà [11]	低平調(low-level tone)
má [55]	高平調(high-level tone)
mâ [51]	下降調(falling tone)
mǎ	軽声(atonic;固有の調値を持たない)

ビルマ語の音節構造は C1(C2)V1(V2)(C3)/T と表すことができる。C は子音、V は母音、T は音節全体にかぶさる声調を表す。C1 には N を除くすべての子音音素が現れ得る。C2 として現れることのできる子音音素は w と y のみである。また、C3 として現れることのできる子音は N および ʔ のみである。N は口蓋垂鼻音であるが、閉鎖は往々にして不完全であり、前の母音を鼻音化するだけで発音が完了することも多い。した

がって多くの文献では、これを単独の鼻音音素として認めず、鼻母音の系列を設定して「母音+n」を単独の音素と解釈している。

音節を構成する分節音の連続のうち -V1(V2)(C3) の部分を韻母と呼ぶ。下にすべての韻母を掲げる。

開音節韻母

i	u
e	o
ɛ	ɔ
a	

N で終わる韻母

iN	uN	
eiN	ouN	
aiN	aN	aun

? で終わる韻母

i?	u?	
ei?	ɛ?	ou?
ai?	a?	au?

このうち、開音節韻母と N で終わる韻母の場合には3種類の声調の対立が見られる。一方、固有語に限った場合、? で終わる韻母を含む音節、すなわち本稿で呼ぶところの促音節は、常に高音域から下降するピッチで発音される。研究者によってはこれを第4番目の声調と見なす。本稿では最終的にこれを声門閉鎖音で終わる音節に下降調が現れたものと解釈することになる。ただし第3章で音韻論的解釈を示すまでは、促音節の声調は表記しないことにする。

本題に入る前に注意すべきことを二つ挙げておく。

まず、本稿では、上に示した音素および音素配列の枠から逸脱する発音は扱わないことにする。ビルマ語の母語話者の中には、借用語を原語に近い形で発音する者がいる。例えば、タクシーを表すビルマ語は英語の taxi に由来する te?si あるいは te?käsi であるが、タクシーを指すの

に [tɛksi] という形を用いる話者がいる。この発音は、音節末に [k] が現れるという点において通常のビルマ語の音素配列から逸脱している。このような発音は本稿では扱わない。

次に、ビルマ語の借用語の促音節が高く発音されるか低く発音されるかは、原語の発音がビルマ語に受容される際の音韻規則とは無関係であると考えられる。借用語が受容される際に規則によって決定されるのはおそらく、分節音そのものおよび分節音の配列、そして、促音節以外の音節の声調である。一方、促音節が高く発音されるか低く発音されるかは、受容の際の規則によっては決定されない。決定されないからこそ、同一の音節が高く発音されたり低く発音されたりするのである。

1. 促音節の発音の実態

促音節を含む借用語の語例を 164 例示す。太字で示したのが促音節である。促音節が連続する場合には間にハイフンを入れておく。促音節のうち後に(L)を付したものは低く発音される可能性がある。しかし、これらが常に低く発音されるとは限らないことに注意していただきたい。つまり(L)を付した促音節は高く発音される場合もあるということである。このことは原則としてすべての借用語に当てはまる。逆に、(L)を付していないものは常に高く発音される。

以下では借用語の後に対応する英語の形式を掲げる。英語形式を掲げるのは、原語が英語ではない場合であっても、英語を経由して借用された可能性の高いものが多いからである。英語形式の後にビルマ語の意味に対応する日本語訳を置く。本稿では、(4)の ?ɛ?ʔûpǎdè のように「借用形式+ビルマ語形式」という構成をなす複合語も借用語として扱う。なぜならこのような複合語の借用形式にも低い促音節が現れることがあるからである。

- | | | |
|---------------------|------------------|-----------|
| (1) ?ǎshɛ? (L)tǎlìn | acetylene | 「アセチレン」 |
| (2) ?ɛ?-shi? | acid | 「酸」 |
| (3) ?ǎkùnke? (L)gwà | Aconcagua | 「アコンカグア山」 |
| (4) ?ɛ?ʔûpǎdè | act + ?ûpǎdè (法) | 「法令」 |
| (5) ?ai? (L)tìn | acting | 「演技」 |

(6) ?ǎdi??ǎbàbà	Addis Ababa	「アジスアベバ」
(7) ?e?(L)dìlei?	Adelaide	「アデレード」
(8) ?àntàtei?	Antarctic	「南極圏」
(9) ?e?(L)sǎpǎrìn	aspirin	「アスピリン」
(10) ?a?(L)tǎlàntei?	Atlantic	「大西洋」
(11) ?òtòmē?-ti?	automatic	「自動」
(12) bē?(L)tíríyá	bacteria	「細菌」
(13) ba?(L)fǎló	Baffalow	「バッファロー」(地名)
(14) bē?-dē?	Baghdad	「バグダッド」
(15) bàndàshǎrìbē?(L)gǎwàn	Bandar Seri Begawan	「バンドルスリブガワン」
(16) ba?sǎkē?bó	basketball	「バスケットボール」
(17) ba?tàn	bat + tàn (細長い物)	「(野球の) バット」
(18) ba?(L)tànbàn	Battamban	「バッターバン」
(19) bē?(L)thǎrì	battery	「電池」
(20) bìsǎtei?	beefsteak	「ビーフステーキ」
(21) bìru?	Beirut	「ベイルート」
(22) bē?(L)θǎlǎhìn	Bethlehem	「ベツレヘム」
(23) bàinsǎkou?	bioscope	「映写機」
(24) bì?(L)sǎké	Biscay	「ビスケー湾」
(25) bìsǎku?	biscuit	「ビスケット」
(26) bǎrei?	brake	「ブレーキ」
(27) bǎra?(L)shē	Brussels	「ブリュッセル」
(28) ba?-jē?	budget	「予算」
(29) ba?(L)sǎká	bus + car	「バス」
(30) kēi?môun	cake + môun (菓子)	「ケーキ」
(31) kǎlǎka?(L)tá	Calcutta	「カルカッタ」
(32) kē?(L)tèin	captain	「キャプテン」
(33) ka?pîtàn	captain	「船長」
(34) kàbai?	carbide	「炭化物」
(35) ka?pyá	card + pya:	「カード」
(36) kē?-shē?	cassette	「カセット」
(37) kē?tǎlau?	catalogue	「カタログ」

(38) kɛʔθǎliʔ	catholic	「カトリック」
(39) chôkǎleʔ	chocolate	「チョコレート」
(40) khǎriʔyàN	Christian	「クリスチャン」
(41) síkǎreʔ	cigarette	「紙巻きタバコ」
(42) shaʔ-kaʔ	circus	「サーカス」
(43) kǎliʔ	clip	「クリップ」
(44) kouʔʔínjì	coate + ʔínjì (シャツ)	「コート」
(45) kùNmyùniʔ	communist	「共産主義者」
(46) kùnkǎriʔ	concrete	「コンクリート」
(47) kùNgǎreʔ	congress	「大会」
(48) kùNshàbétìʔpàtì	Conservative Party	「(英国の) 保守党」
(49) kàNthǎraiʔ	contract	「契約」
(50) khǎriʔ-kɛʔ	cricket	「クリケット」
(51) kaʔtǎleiʔ	cutlet	「コロッケ」
(52) shaiʔpǎraʔ	Cyprus	「キプロス」
(53) chɛʔ(L)kòsǎlòbɛʔ(L)kíyá	Czechoslovakia	「チェコスロバキア」
(54) dɛʔ(L)ká	Dakka	「ダッカ」
(55) dǎmaʔsǎkaʔ	Damascus	「ダマスカス」
(56) déiNmaʔ	Denmark	「デンマーク」
(57) dìʔ(L)jìʔ(L)tè	digital	「デジタル」
(58) dàinʔauʔ(L)sìN	dioxin	「ダイオキシン」
(59) dauʔ(L)tà	doctor	「博士」
(60) dáinnǎmaiʔ	dynamite	「ダイナマイト」
(61) ʔɛʔ(L)sǎkìmó	Eskimo	「エスキモー」
(62) pheʔ-shiʔ	fascist	「ファシスト」
(63) fɛʔ(L)ɛ̀N	fashion	「ファッション」
(64) fɛʔ	fax	「ファックス」
(65) fɛʔ(L)sìmə̀lì	faximilie	「ファクシミリ」
(66) geiʔ	gate	「出入口」
(67) gauʔ(L)θí	golf + θí (実る)	「ゴルフ」
(68) gaiʔ	guide	「ガイド」
(69) haiʔ(L)fà	Haifa	「ハイファ」
(70) heʔ(L)tà	hectare	「ヘクタール」

(71)	hai? (L)dǎròjìN	hydrogen	「水素」
(72)	?ei? ?àinbwì	HIV	「HIV」
(73)	hai? (L)dǎrǎba?	Hyderabad	「ハイデラバード」
(74)	?ai? (L)sǎkǎrìN	ice cream	「アイスクリーム」
(75)	?ai? (L)sǎlàN	Iceland	「アイスランド」
(76)	?i? (L)sǎlàN	Islam	「イスラム」
(77)	?i? (L)sǎlàNmàba?	Islamabad	「イスラマバード」
(78)	je? (L)kǎshànbi?lâ	Jacksonville	「ジャクソンビル」
(79)	je? lèyìN	jet + lèyìN (飛行機)	「ジェット機」
(80)	kànshe?sití	Kansas City	「カンザスシティー」
(81)	kha? (L)tǎmàndù	Katmandu	「カトマンズ」
(82)	kùwei?	Kuwait	「クウェート」
(83)	le? (L)tìN	Latin	「ラテン語」
(84)	la? (L)tìtu?	latitude	「緯度」
(85)	le? (L)bǎnùN	Lebanon	「レバノン」
(86)	lai? (L)béríyá	Liberia	「リベリア」
(87)	li? (L)byá	Libya	「リビア」
(88)	lai? (L)hébíwei?	light heavy weight	「ライトヘビー級」
(89)	li? (L)sǎbún	Lisbon	「リスボン」
(90)	ma? dǎri?	Madrid	「マドリード」
(91)	me? (L)gǎzín	magazine	「雑誌」
(92)	màkē?(L)shà	Makasal	「マカッサル」
(93)	mei?-ka?	make-up	「メーキャップ」
(94)	mǎle?(L)kà	Malacca	「マラッカ」
(95)	mòlǎdai?	Maldives	「モルジブ」
(96)	ma?	March	「3月」
(97)	ma?-kē?	market	「市場」
(98)	màmǎlei?yò	marmalade + yò(ジャム)	「マーマレード」
(99)	ma? (L)shùyàmà	Matsuyama	「松山」(地名)
(100)	móri?cǎ	Mauritius	「モーリシャス」
(101)	mē? (L)kǎsìkò	Mexico	「メキシコ」
(102)	mai? (L)kǎròwê	microwave	「極超短波」
(103)	mi? (L)dèwei?	middle weight	「ミドル級」

(104)	mi? (L)sătà	Mr.	「ミスター」
(105)	mi? -sɛ?	Mrs.	「ミセス」
(106)	mu? (L)səlìN	Muslim	「イスラム教徒」
(107)	nɛ? (L)shìmyi?	Neisse + myi? (川)	「ナイセ川」
(108)	năyú hɛ? (L)barídí	New Hebrides	「ニューヘブリデス」
(109)	năyú yau?	New York	「ニューヨーク」
(110)	nai? (L)thǎròjìN	nitrogen	「窒素」
(111)	nô ti?	notice	「通知」
(112)	? au? (L)tòbà	October	「10月」
(113)	?òlàn pi?	Olympic	「オリンピック」
(114)	? au? (L)dó	outdoor	「屋外」
(115)	? au? (L)sìjìN	oxygen	「酸素」
(116)	pɛ? (L)kìN	packing	「パッキング」
(117)	pà ki? (L)sătàN	Pakistan	「パキスタン」
(118)	pa? (L)kǎshé	Pakse	「パクセー」(ラオスの地名)
(119)	pà le? (L)sătáIN	Palestine	「パレスチナ」
(120)	pa? sǎpô	passport	「パスポート」
(121)	pɛ? (L)sì	Pepsi	「ペプシコーラ」
(122)	pɛ? (L)thǎrò pɛ? bǎlô sǎkhô	Petropavlovsk	「ペトロパブロフスク」
(123)	phe? (L)bùrì	Phetchaburi	「ペチャブリー」(タイの地名)
(124)	phi? (L)shànù lau?	Phitsanulok	「ピッサヌローク」(タイの地名)
(125)	fòtò sǎtɛ?	photostat	「フォトスタット」
(126)	pai?	pipe	「管」
(127)	pai? láiN	pipeline	「パイプライン」
(128)	pǎ la? (L)sătà	plaster	「石膏」
(129)	pǎ la? sǎti?	plastic	「プラスチック」
(130)	pǎ le? (L)fáUN	platform	「歩道」
(131)	pǎ la?	plug	「プラグ」
(132)	pômô rɛ? (L)bì	Port Moresby	「ポートモレスビー」
(133)	pò tɛ?	potash	「カリ」
(134)	rì ya?	Riyadh	「リヤド」
(135)	ra? (L)bìbó	rugby ball	「ラグビー」
(136)	shǎ la?	salad	「サラダ」

(137)	sha? (L)pòrò	Sapporo	「札幌」
(138)	se? (L)tìnbà	September	「9月」
(139)	shai? (L)béríyá	Siberia	「シベリア」
(140)	shai? (L)ká	sidecar	「人力車」
(141)	shá inbou?	signboard	「看板」
(142)	shi? (L)kìN	Sikkim	「シッキム」
(143)	sǎ kei?	skate	「スケート」
(144)	shǎ lai?	slide	「スライド」
(145)	su?pyou?	soup + pyou? (煮る)	「スープ」
(146)	sǎpô ca?	sport shirt	「スポーツシャツ」
(147)	shu? (L)shù	Suttsu	「寿都」(地名)
(148)	shi? (L)dǎnì	Sydney	「シドニー」
(149)	tei? khwè	tape + khwè (巻く)	「カセットテープ」
(150)	tei? rǎkòdà	tape recorder	「テープレコーダー」
(151)	te? (L)sǎméníyá	Tasmania	「タスマニア」
(152)	te? (L)sì ~ te? (L)kǎsì	taxi	「タクシー」
(153)	te? thǎr e?	tetrex	「テトレックス」(繊維の一種)
(154)	te? (L)thǎrùN	tetron	「テトロン」(繊維の一種)
(155)	thǎ ra? ká	truck + car	「トラック」
(156)	tai? - fai?	typhoid	「チフス」
(157)	yù ne? (L)sǎkò	UNESCO	「ユネスコ」
(158)	yùnì she?	UNICEF	「ユニセフ」
(159)	yùn ni?	unit	「単位」
(160)	bi? (L)tóríyá	Victoria	「ビクトリア」(英国女王の名)
(161)	bìy e? (L)nàN	Vietnam	「ベトナム」
(162)	bá inra?	virus	「ウイルス」
(163)	bai? (L)tàmìn	vitamine	「ビタミン」
(164)	zi? có	zipper + có (紐)	「ジッパー」

2. 低い促音節が現れ得る環境を探る

低い促音節が現れ得る環境を明らかにするには、低い促音節が決して現れない環境を明らかにすればよい。以下では低い促音節が現れない環

境として、「語末」「高い促音節の直前」「下降調の直前」という三つの環境を見ていく。

2.1 低い促音節が現れない環境(1)——語末

語末には決して低い促音節が現れない。したがって、上で(1)から(164)に示した語例に現れる促音節のうち、以下に下線で示した促音節は決して高く発音されることがない。

- (2) ?ε?shi? acid (7) ?ε?(L)dìlei? Adelaide (8) ?àntàtei? Antarctic
 (10) ?a?(L)tǎlàntei? Atlantic (11) ?òtòmè?ti? automatic
 (14) bε?dε? Baghdad (20) bîsǎtei? beefsteak (21) bìru? Beirut
 (23) bàinsǎkou? bioscope (25) bìsǎku? biscuit (26) bǎrei? brake
 (28) ba?jε? budget (34) kàbai? carbide (36) kε?shε? cassette
 (37) kε?tǎlau? catalogue (38) kε?θǎli? catholic (39) chôkǎle? chocolate
 (41) síkǎre? cigarette (42) sha?ka? circus (43) kǎli? clip
 (45) kùnmyùni? communist (46) kùnkǎri? concrete
 (47) kùngǎre? congress (49) kànthǎrai? contract
 (50) khǎri?kε? cricket (51) ka?tǎlei? cutlet (52) shai?pǎra? Cyprus
 (55) dǎma?sǎka? Damascus (56) déinma? Denmark
 (60) dáinnǎmai? dynamite (62) phe?shi? fascist (64) fε? fax
 (66) gei? gate (68) gai? guide (73) hai?(L)dǎrǎba? Hyderabad
 (77) ?i?(L)sǎlànmàba? Islamabad (82) kùwei? Kuwait
 (84) la?(L)tìtu? latitude (88) lai?(L)hébíwei? light heavy weight
 (90) ma?dǎri? Madrid (93) mei?ka? make-up (95) mòlǎdai? Maldives
 (96) ma? March (97) ma?kε? market (103) mi?(L)dèwei? middle weight
 (105) mi?sε? Mrs. (109) nǎyúyau? New York (111) nôti? notice
 (113) ?òlànpì? Olympic (124) phi?(L)shànùlau? Phitsanulok
 (125) fòtòsǎte? photostat (126) pai? pipe (129) pǎla?sǎti? plastic
 (131) pǎla? plug (133) pòte? potash (134) rìya? Riyadh
 (136) shǎla? salad (141) sháinbou? signboard (143) sǎkei? skate
 (144) shǎlai? slide (146) sǎpôca? sport shirt (153) te?thǎre? tetrex
 (156) tai?fai? typhoid (158) yùnìshε? UNICEF (159) yùni? unit
 (162) báinra? virus

これに準じるのが合成語等における要素間境界の直前である。以下に見ていく例では、要素間境界の直前に位置する促音節が低く発音されることがない。このような現象が見られる借用語には、原語の形式そのものに切れ目がある場合と、ビルマ語に入ってから合成が起きた場合の二つがある。

まず、原語の形式そのものに切れ目がある場合である。次に挙げる例の下線で示した促音節は低く発音されることがない。これは原語における要素の切れ目がビルマ語においても受け継がれていると見ることができる。

(16) baʔsǎ <u>kε</u> ʔbó	basketball
(48) kùnshàbé <u>ti</u> ʔpàtì	Conservative Party
(80) kàns <u>he</u> ʔsìtí	Kansas City
(127) <u>pai</u> ʔláiɴ	pipeline
(150) <u>tei</u> ʔràkòdà	tape recorder

もちろん、原語の形式に切れ目があるかどうかは元の言語についての知識がなければ分からない。上に挙げた例の場合、原語の単語の後部要素が *ball, party, city, line, recorder* と、ビルマ語話者にも馴染みのある英語形式であることと関係しているのだろう。前部要素も、*basket, pipe, tape* に関してはビルマ語話者に馴染みがあると言ってよい。次の例の促音節が低く発音されないのも、**H** も **I** も **V** も元々は英語における別々の単語の頭文字であるから、原語に切れ目があることに起因していると考えてよいだろう。

(72) ʔeiʔʔàinbwì	HIV
------------------	-----

英語のアルファベットの読み方はビルマ語話者の間に浸透している。したがって、ビルマ語話者にとって、**HIV** が略語であることおよび **H** と **I** の間に切れ目があることを見出すことは難しいことではない。一方、次の例の場合、原語は英語ではないので、ビルマ語話者には切れ目の予想が難しいと考えられる。しかしこの促音節も常に高く発音される。

(6) ʔǎdiʔʔǎbàbà Addis Ababa

この原因は、後部要素の最初の音節が ʔǎ であることに求めることができるだろう。ビルマ語には同形の接頭辞 ʔǎ- がある。接頭辞であるため語頭に現れることが多い。このためビルマ語話者は(6)の2番目の ʔǎ の前に切れ目の存在を感じるのではないか。

次に、ビルマ語に入ってから合成が起きたと考えられるものを見る。これには、「借用語+借用語」という構成になっているものと、「借用語+ビルマ語固有の形式」という構成になっているものがある。まず次の例は「借用語+借用語」という構成になっているものである。

(155) thǎraʔká truck + car

一方、「借用語+ビルマ語固有の形式」という構成になっているのは、次に挙げるようなものである。(4)(30)(44)(79)(98)(164)は後部要素が名詞由来、(35)(145)(149)は後部要素が動詞由来である。なお、(4)(30)と(145)の例はそれぞれ、後述する下降調の直前および高い促音節の直前という条件が低く発音される可能性を妨げる要因になっている可能性もある。

(4) <u>ʔɛʔʔûpǎdè</u>	act + ʔûpǎdè
(30) <u>keiʔmôun</u>	cake + môun
(44) <u>kouʔʔínjì</u>	coate + ʔínjì
(79) <u>jeʔlèyìn</u>	jet + lèyìn
(98) <u>màmǎleiʔyò</u>	marmalade + yò
(164) <u>ziʔcó</u>	zipper + có
(35) <u>kaʔpyá</u>	card + pyá
(145) <u>suʔpyouʔ</u>	soup + pyouʔ
(149) <u>teiʔkhwè</u>	tape + khwè

次に挙げるものも「借用語+ビルマ語固有の形式」という構成だが、後部要素が独立形態素ではないという点で上掲のものとは異なる。

(17) baʔtàn bat + tàn

この借用語の後部要素は接頭辞 ʔä- を伴った ʔätàn「細長いもの」という形で初めて独立した形式になる。後部要素が拘束形態素であるという点で二つの要素の結びつきが強いと言えるが、それにもかかわらず要素間の切れ目が意識されているのだと考えられる。

このように要素間の切れ目の前では低い促音節の出現が妨げられる傾向があるのだが、これは絶対的な条件ではない。下に挙げる例では、要素間の切れ目があるにもかかわらず、下線を付した促音節は低く発音してもよい。

- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| (29) <u>baʔ(L)sāká</u> | bus + car |
| (67) <u>gauʔ(L)θí</u> | golf + θí |
| (74) <u>ʔaiʔ(L)sākārìN</u> | ice cream |
| (88) <u>laiʔ(L)hébíweiʔ</u> | light heavy weight |
| (140) <u>shaiʔ(L)ká</u> | sidecar |

なお(29)と(74)は、厳密に言えば、原語に対応する切れ目が、後続する軽声音節の次にある。このことが低い促音節の出現を妨げない理由になっている可能性はある。

2.2 低い促音節が現れない環境(2)——高い促音節の直前

高い促音節の直前に現れた促音節は、常に高く発音される。以下に、高い促音節の直前に現れた促音節の例を挙げる。これらは常に高く発音される。

- | | |
|------------------------|-----------|
| (2) <u>ʔεʔshiʔ</u> | acid |
| (11) <u>ʔòtòmεʔtiʔ</u> | automatic |
| (14) <u>bεʔdeʔ</u> | Baghdad |
| (28) <u>baʔjeʔ</u> | budget |
| (36) <u>kεʔsheʔ</u> | cassette |
| (42) <u>shaʔkaʔ</u> | circus |

(50) khǎri?kε?	cricket
(62) phe?shi?	fascist
(93) mei?ka?	make-up
(97) ma?kε?	market
(105) mi?se?	Mrs.
(156) tai?fai?	typhoid

「高い促音節の直前」という条件には、次の例のような、当該の促音節と高い促音節との間に軽声音節が一つだけ介在する場合も含む。これらも常に高く発音される。

(38) kε?θǎli?	catholic
(37) kε?tǎlau?	catalogue
(16) ba?sǎkε?bó	basketball
(51) ka?tǎlei?	cutlet
(52) shai?pǎra?	Cyprus
(55) dǎma?sǎka?	Damascus
(90) ma?dǎri?	Madrid
(129) pǎla?sǎti?	plastic
(153) te?thǎre?	tetrex

しかし、当該の促音節と高い促音節の間に軽声音節が 2 個以上存在すると、当該の促音節は低く発音され得る。

(73) hai?(L)dǎrǎba? Hyderabad

ところで、「高い」促音節という条件を付けるのは、低い促音節の直前に現れた促音節は低く発音される可能性があるからである。例えば(57)の di?ji?te` の最初の音節 di? は、ji? が低く発音された場合に、高い促音節の直前という条件に当てはまらない。この場合、この音節は低く発音することができるのである。

これには更なる説明を要する。di?ji?te` には二つの促音節があるので、促音節の高低の組み合わせには論理的に次の 4 種類が考えられる。[H]

と [L] は、直前の音節がそれぞれ「高」および「低」のピッチで発音されることを表す。

- (a) di?[H] ji?[H] tè
- (b) di?[H] ji?[L] tè
- (c) di?[L] ji?[L] tè
- (d) di?[L] ji?[H] tè

このうち (d) は、di? が高い促音節の前で [H] になっているので、不適格な発音として排除できる。ところが実際には、(b) の発音も適格とは言えない。(a)-(d) の適格性は次に示すとおりである。

- (a) di?[H] ji?[H] tè
- (b) ? di?[H] ji?[L] tè
- (c) di?[L] ji?[L] tè
- (d) * di?[L] ji?[H] tè

(b) の発音は、上で行った議論によっては排除することができない。これについてはどのように考えるべきだろうか。この問題を解く鍵になるのが、(53) の *che?kòsǎlòbe?kíyá* の発音である。この借用語にも二つの促音節があるので、促音節の組み合わせは論理的に 4 種類存在する。下に示すように、4 種類の論理的可能性のうち、二つの促音節の高低が異なる (f) と (h) は、好まれない発音である。

- (e) che?[H] kòsǎlòbe?[H] kíyá
- (f) ? che?[H]kòsǎlòbe?[L] kíyá
- (g) che?[L] kòsǎlòbe?[L] kíyá
- (h) ? che?[L] kòsǎlòbe?[H] kíyá

このことから、おそらく、同一単語内に低く発音される可能性のある促音節が複数個現れた場合、それらの高低は一致させたほうが良いという習慣があるのだと考えられる。(b) の発音が好ましくないのは、この習慣に合致しないからである。ただし、(f)(h) に比べると、(b) のほうがより適

格性が低いようである。これについては、隣り合った音節の場合にはこの発音習慣がより強く働くためだと考えたい。

2.3 低い促音節が現れない環境(3) —— 下降調の直前

下降調を伴った音節の直前に現れた促音節は常に高く発音される。この中には、当該の促音節と後続する下降調音節の間に一つだけ軽声音節が介在する場合も含む。例を挙げる。

(33) <u>ka</u> ?pîtàN	captain
(78) je?(L)kăshàNbi?lâ	Jacksonville
(100) móri?câ	Mauritius
(120) <u>pa</u> ?săpô	passport
(122) pe?(L)thărôpe?bălôssäkhô	Petropavlovsk

2.4 低い促音節が現れ得る環境

2.1 から 2.3 において低い促音節が決して現れない 3 種類の環境を示した。それは「語末」「高い促音節の直前」「下降調の直前」である。これ以外の環境に現れたあらゆる促音節は低く発音される可能性がある。

ただし例外がある。英語の Christian の借用語である(40) khări?yàN の促音節は低く発音される可能性のある条件に現れている。ところが決して低く発音されない。これについては、khări?yàN という借用語がビルマ語に入った時期が古いためビルマ語の語彙と見なされるようになってしまったからだと考えたい。その証拠に、英語音との対応において、この語彙は通常の借用語とは異なる対応を示している。具体的には、-tian の部分の子音[tj]はビルマ語では /c/ で受容されるのが普通だが /y/ になっている。これは、借用にかかわる音韻規則が受容当時において現在と異なるものであったか、何らかの理由でビルマ語内で発音が変化してしまったかのどちらかであると考えられる。

3. 促音節の音韻論的解釈

低い促音節は借用語にしか現れないので、ビルマ語の音韻論にとって周辺的な現象という捉え方もできる。しかし、その音韻論的位置付けを論じておくことには意味がある。それは次のような事実からも言えることである。例えば、 $leʔtìN$ という音列の最初の促音節を高く発音したなら、この音列は、「椅子の肘掛け」という意味(すなわち、 $leʔ$ 「手」と $tìN$ 「置く」という二つの形態素からなるという解釈)、および、「ラテン語」(英語 *Latin* の借用)という意味の両方を表し得る。しかし、促音節を低く発音したなら、この音列は「ラテン語」という意味しか表さない。高く発音した場合は両方の意味を表し得るので2種類の発音は完全な最小対とは言えないが、低く発音した場合には一方の意味しか表し得ないから、促音節のピッチの高低は意味の区別に多少ともかかわっているといえることができる。したがって高い促音節と低い促音節に異なる音韻論的ステータスを与える蓋然性が存在すると思われる。以下ではそれぞれの促音節の音韻論的位置付けを考えていく。

さて、通常の高い促音節に対する音韻論的解釈の可能性には少なくとも次のようなものがある。

- (i) 促音節に対して第4の声調を設定する。末尾の声門閉鎖音はこの第4の声調の内在的特徴である。したがって促音節は音韻論的には開音節である。
- (ii) 促音節は声門閉鎖音で終わる閉音節であり、それに第4の声調が現れている。
- (iii) 促音節は声門閉鎖音で終わる閉音節であり、それに下降調が現れている。
- (iv) 促音節は声門閉鎖音で終わる閉音節であり、かつ示差的な声調が生起しない。

先行研究の中で最も多い解釈は(i)のものである。Stewart (1939, 1955)、Cornyn (1944)、McDavid (1945)、西田(1972)、藪(1992)などがこの考え方を取っている。Wheatley (1982)と Myint Soe (1999)は、音節末の声門閉鎖音が声調からは独立したものとする解釈の可能性を残しながらも、基本的にはこの解釈を取っていると見てよいだろう。

(ii)の考え方を取るのは Minn Latt (1962)、Okell (1969)、Green (2005) などである。この解釈を取った場合、第4の声調が現れる音節は常に声門閉鎖音終わりの閉音節であり、また同時に、声門閉鎖音終わりの閉音節に現れる声調は常に第4の声調だということになり、音韻論的には余剰性を含むことになる。

(iii)は Armstrong and Pe Maung Tin (1925)および Minn Latt Yêkháun (1966)などが示している解釈である。後者は Minn Latt (1962)と同一の著者であるが、(ii)の考え方を取る前著とは異なる考え方を示している (pp.95-116)。

(iv)の考え方を示している研究は比較的少ない。Bradley (1982:121)は “it is possible to regard the 'killed' syllable type as non-contrastive” としてこの解釈の可能性を示唆している。筆者は、ビルマ語の入門書(加藤 1998)において、促音節には示差的声調が現れず、そのピッチは自動的に決まるという考え方に基づいて促音節の発音を説明した。また、Bernot (1963)は、促音節では声調が「中和」して “architonème” が現れるという考え方を示しており、これはここに含めることができるだろう。

前節で見たように、低い促音節は、高い促音節の直前および下降調を伴った音節の直前では現れない。この事実は、高い促音節の音韻論的解釈にとって重要である。低い促音節の出現に関して同じ影響を及ぼすという事実は、高い促音節と下降調を伴った音節が共通する音韻論的価値を持っているということを示唆するからである。

高い促音節と下降調を伴った音節が共通する音韻論的価値を持っているという解釈の可能性を示唆する事実があと三つある。

一つめは、高い促音節の調値と下降調の調値が非常に良く似ているという音声的事実である。下降調の調値は[51]である。一方、高い促音節も、下降の幅が聴覚的には下降調ほど大きくないように感じられることもあるが、同じく[51]と表記してもいいような調値を取る。Watkins(2000)の実験音声学的研究によれば、creaky tone (下降調) と killed tone (高い促音節の声調) は極めて似通っている。Watkins(同上)によれば、creaky tone と killed tone は pitch, duration, phonation type の3点において見分けがつかないほど類似しているという。

二つめは、高い促音節と下降調を伴った音節が自由に交替できる場合があるということである。下に二つの例を挙げる。最初の例は、綴り字

上の発音は $m\hat{a}$ であるが、 $m\hat{a}$ および $ma?$ のどちらで発音しても構わない。もう一つの例は、綴り字上は $ye?θ\acute{a}$ と書かれるが、 $ye?θ\acute{a}$ と発音しても $y\hat{e}θ\acute{a}$ と発音しても構わない。

$m\hat{a}$	~	$ma?$	「女性の敬称」
$ye?θ\acute{a}$	~	$y\hat{e}θ\acute{a}$	「~するにもかかわらず」

三つめは、所有を表す表現における声調の交替である。所有者を表す固有名詞または代名詞は、最後の音節が低平調あるいは高平調である場合、最後の音節の声調を下降調に替えることができる。例えば、固有名詞 $m\grave{u}n\acute{m}\grave{u}n$ は $m\grave{u}n\acute{m}\hat{u}n$ に、同じく $mya?th\acute{u}n$ は $mya?th\hat{u}n$ になる場合がある。

$m\grave{u}n\acute{m}\hat{u}n$	$?\grave{e}in$	
(人名)	家	「モンモンの家」

$mya?th\hat{u}n$	$?\grave{e}in$	
(人名)	家	「ミヤットウンの家」

一方、当該の音節が下降調あるいは促音節である場合、このような交替は決して起こらない。例えば、固有名詞 $ph\acute{o}un\acute{m}y\hat{i}n$ と $th\acute{u}n\acute{m}ya?$ の最後の音節は非所有表現の場合と常に同じである。

$ph\acute{o}un\acute{m}y\hat{i}n$	$?\grave{e}in$	
(人名)	家	「ポンミンの家」

$th\acute{u}n\acute{m}ya?$	$?\grave{e}in$	
(人名)	家	「トウンミヤツの家」

このように、高い促音節と下降調を伴った音節は、1)低い促音節の出現に関して同じ影響を及ぼすこと、2)調値が類似していること、3)自由に交替できる場合があること、4)所有表現における振る舞いが同じであること、という4点において、共通する特徴を有しているのである。本

稿では、この事実を音韻解釈に反映させ、「高い促音節は声門閉鎖音で終わる音節に下降調が現れたものである」という上記(iii)の考え方を採用する。

それでは、低い促音節は音韻論的にどのように解釈するべきだろうか。高い促音節を、声門閉鎖音で終わる音節に下降調が現れたものと考えるのであれば、低い促音節も、声門閉鎖音で終わる音節に何らかの声調が現れたものと考えるのが妥当である。選択肢は低平調か高平調のいずれかであるが、低い促音節が[11]という調値を取るのを考えれば、同じく[11]という調値を取る低平調しか我々が取るべき選択はないだろう。したがって、本稿では、「低い促音節は声門閉鎖音で終わる音節に低平調が現れたものである」という考え方を採用する。

促音節(*checked syllable*)以外の音節、すなわち開音節と鼻音終わりの閉音節を平音節(*normal syllable*)と呼ぶことにすれば、ビルマ語の声調は音節の種類によって次のような分布を示すことになる。促音節と低平調の組み合わせを括弧でくくったのは、これが借用語にしか現れない組み合わせだからである。

	平音節	促音節
低平調	mà	(mà?)
高平調	má	
下降調	mâ	mâ?

このように考えると、借用語にまで視野を広げた場合、ビルマ語の促音節には対立する複数の声調が現れるということになる。

この考え方に従えば、例えば「椅子の肘掛け」を表す $leʔtìN$ は、 $lêʔtìN$ と表記するのが正しく、「ラテン語」という意味しか表さない $leʔtìN$ は、 $lèʔtìN$ と表記するのが正しいということになる。ただし、ビルマ語固有の語彙については、促音節には下降調が現れるということが決まっているので、表記の便宜上、「椅子の肘掛け」は $leʔtìN$ のように声調を表記しないことにし、低い促音節で発音された借用語のみ $lèʔtìN$ のように声調を表記することにするのも良いだろう。

4. 結論と今後の展望

本稿の議論で示した結論をまとめておく。まず、「語末」「高い促音節の直前」「下降調の直前」という三つの環境には決して低い促音節は現れない。一方、これ以外の環境に現れたあらゆる促音節は低く発音される可能性がある。そして音韻論的には、低い促音節の場合は促音節に低平調が現れているのであり、通常の促音節の場合は促音節に下降調が現れているのである。

Matisoff (1991)や西田(2000:271-288)などが詳しく論じているように、いわゆる *Burmish* と呼ばれる言語群のうち、ロンウオー語(Lhaovo; マル語 Maru)やラシ語(Lashi)やアツィ語(Atsi; ツアイワ語 Zaiwa)などを含む Maru-Lashi-Atsi 諸語のグループでは、閉鎖音終わりの音節に複数の声調が見られる場合が多い。一方、同じ *Burmish* の言語であるビルマ語諸方言やポン語(Hpun)では閉鎖音終わりの音節に現れる声調はひとつである。しかし、現代標準ビルマ語において借用語にまで視野を広げると、閉鎖音終わりの音節に複数の声調が現れるということになる。

最後に重要な問題を指摘しておく。本稿で論じてきた三つの環境以外では促音節は低く発音される可能性があるのだが、本稿ではこれらが低く発音される可能性を有しているという指摘にとどまり、実際にどの程度の頻度で低く発音されているのかについては議論することができなかった。どうやら借用語によって、促音節が低く発音される頻度には差がありそうである。例えば、(114)の *ʔauʔdó* の促音節は、今回調査に協力してもらった7人のビルマ語話者のうち、2人が高く発音するほうを好むとの判断を示し、残りの5人が低く発音するほうを好むとの判断を示した。ところが(130)の *pǎleʔfáun* の促音節では、5人が高く発音するほうを好むとの判断を示し、2人が低く発音するほうを好むとの判断を示した。また(138)の *seʔtìnbà* では、7人全員が低く発音するほうを好むとの判断を示した。このように単語によってどちらの発音が好まれるかには違いがある。今のところ、音韻的条件としては、後続の音節が高平調の場合よりも低平調の場合のほうが低い発音が好まれるという印象を筆者は持っているが、確定的ではない。おそらくこれは音韻的条件のみによって規定できるものではない。音韻的条件以外に、借用語の入ってきた時期の差、話者の外国語に関する知識の差、ビルマ語内の方言差、話者の世代差等々、考慮すべき要因が多いように思える。このような様々

な要因が借用語の促音節の発音にどのように影響しているのかを調査することが今後の課題として残されている。

引用文献

- Armstrong, Liliás E. and Pe Maung Tin. 1925. *A Burmese Phonetic Reader*. London: University of London Press.
- Bernot Denise. 1963. “Esquisse d'une description phonologique du birman”. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 58: 164-224.
- Bradley, David. 1982. “Register in Burmese”. (In) D. Bradley (ed.) *Papers in South-East Asian Linguistics No.8: Tonation*. Pacific Linguistics Series A - No.62, pp.117-132. Canberra: Australian National University
- Cornyn, William. 1944. *Outline of Burmese Grammar*. Language 20.4 supplement (Language dissertation 38).
- Green, Antony Dubach. 2005. “Word, foot, and syllable structure in Burmese”. To appear in J. Watkins (ed.) *Studies in Burmese Linguistics in Honour of John Okell*.
- 加藤昌彦 1998. 『エクスプレス ビルマ語』 東京:白水社.
- Kato, Atsuhiko. 1999. “Comments on Prof. Matisoff's ‘Tibeto-Burman Tonology in an Areal Context’”. (In) Shigeki Kaji (ed.) *Proceedings of the Symposium Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena --Tonogenesis, Typology, and Related Topics--*, pp.33-35.
- Matisoff, James A. 1991. “Jiburish revisited: tonal splits and heterogenesis in Burmo-Naxi-Lolo checked syllables”. *Acta Orientalia* (Copenhagen) 52:91-114.
- McDavid, Raven I. 1945. “Burmese Phonemics”. *Studies in Linguistics* 3.1:6-18.
- Minn Latt. 1962. “First Report on Studies in Burmese Grammar”. *Archiv Orientální* (Prague) 30:50-115.
- Mînn Latt Yêkháun. 1966. *Modernization of Burmese*. Prague: Oriental Institute in Academia, Publishing House of the Czechoslovak Academy of Science.
- Myint Soe. 1999. *A Grammar of Burmese*. Ph.D. dissertation, University of Oregon.
- 西田龍雄 1972. 『緬甸館訳語の研究 ビルマ言語学序説』 京都:松香堂.
- 2000. 『東アジア諸言語の研究 I 巨大言語群—シナ・チベット語族の展望』 京都:京都大学学術出版会.

- Okell, John. 1969. *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.
- Sprigg, R. K. 1964. "Burmese orthography and the tonal classification of Burmese lexical items". *Journal of Burma Research Society* XLVII, ii:415-440.
- Stewart, J. A. 1939. *An Introduction to Colloquial Burmese*. Rangoon: The British Burma Press.
- . 1955. *Manual of Colloquial Burmese*. London: Luzac.
- Than Than Win. 1998. *Burmese-English Accent: Description, Causes, and Consequences*. Ph.D. Dissertation, Northern Illinois University.
- Watkins, Justin. 2000. "Notes on creaky and killed tone in Burmese". (In) Hyum-Joo Lee, Zoë Toft and Carlo A. Collela (eds.) *SOAS Working Papers in Linguistics and Phonetics* 10: 139-149
- Wheatley, K. Julian. 1982. *Burmese: A Grammatical Sketch*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.
- 藪司郎 1992. 「ビルマ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典』 3:567-610, 東京:三省堂.

Low Checked Syllables in Loanwords of Modern Burmese

KATO Atsuhiko

Keywords: Burmese, Tone, Checked Syllable, Loanword

Checked syllables of modern Burmese are pronounced high in original Burmese words, but may be pronounced low in loanwords. This paper finds out the conditions where low checked syllables can occur, and also proposes a phonological interpretation of two kinds of checked syllables.